歴史総合-DX

 **1949年③（昭和24）モンゴル・チベット・新彊ウイグル**

多くの日本人が戦前に入植した「満蒙」（今の黒竜江省・吉林省・遼寧省などの中国東北部と内モンゴルの大半）から日本軍に追われた国民党軍（蒋介石軍）がチベットの山岳地帯に移駐したことで中国（当時は中華民国）のチベット干渉が始まった。また、第二次世界大戦（大東亜戦争）で日本が敗戦する直前の1945年（昭和20）2月、ソ連領のクリミア半島のヤルタで、日本の戦後処理をローズベルト（米）チャーチル（英）スターリ ン（ソ）が会談し、ソ連の参戦と北方四島の引き渡しの密約と共に、日本の占領下にあったモンゴル（モンゴル人民共和国、1924年建国）を2つに分割する密約がなされた。終戦直前の8月10日、内モンゴルにソ連軍・モンゴル軍が満蒙に侵攻し、反日蜂起により同胞は解放されたが、やがてソ連の衛星国となった。かたや外モンゴルは中華民国の支配下にあり、内外のモンゴル人が民族統一されることはなく、その不満が1947年（昭和22）に爆発したが、国民政府軍（国府軍）により鎮圧された。1949年（昭和24）に中華人民共和国（中国）が成立すると、人民解放軍が内モンゴルのオルドスを占領、中国の支配下ながら自治権を得た。一方、チベットは、1751年にラマ教のダライ・ラマ7世が清朝の支配強化策を受け入れて清国の保護国となって以来、チベット仏教の国として存続し、1940年（昭和15）に14 世が最高位のラマ（高僧）を継承した。一方、ラマ教ゲルグ派のバンチェン・ラマ9世が没し、戦後の1949年（昭和24）に転生者として5才の少年を生き仏としてバンチェン・ラマ10世と認め、同年の中華人民共和国の成立で、チベットに2人のラマ（高僧）が存在することとなった。チベットの北にあるイスラム教徒のウイグル族の新彊ウイグルでは、中国共産党が1950年代に、復員した漢民族の人民解放軍の兵士を北部に入植させて、隣国のソ連との国境を警備させたことで、先住民族のウイグル族の間で対立が生まれ、ウイグル族はタクラマカン砂漠の南の地に住むようになった。1955年（昭和30）に中国が新彊ウイグルを併合して、新彊ウイグル自治区となり、チベットにも中国の人民解放軍が侵攻、1959年（昭和34）に弾圧を受けたダライ・ラマ14世はインドに亡命、6年後の1965年（昭和40）にチベットが自治区として中国に併合された結果、宗教を基本的に認めない中国とチベット仏教のチベット自治区の間で紛争が絶えず、非暴力によるチベット解放を提唱するダライ・ラマ14世は1989年（平成元）にノーベル平和賞を受賞、バンチェン・ラマ10世の没後 （1995）に6才の少年を11世にインドから認定したが、中国共産党は別の少年を11世に擁立した。また、その後も、内モンゴル自治区（内蒙古自治区）、新彊ウイグル自治区で漢民族との間で紛争が絶えず、宗教を原則認めず、「宗教の中国化」を図る中国政府は解決できない人権問題を抱え込み、国際的な非難にさらされることとなった。